



神戸大学 広報誌 [kaze]
Kobe University Public Relations Magazine

Dec.2018 Vol.12 <http://www.kobe-u.ac.jp>

特集1 研究・教育から事業化まで、社会貢献に直結する実践的プロジェクトが始動
認知症予防の先進大学へ！

特集2 学際的視点で研究する子育てと幸福度の関係

実証データに基づく日本の教育改革を目指して

特集1 研究・教育から事業化まで、社会貢献に直結する実践的プロジェクトが始動

認知症予防の先進大学へ！

日本の認知症患者数は、2025年には700万人に達すると予想され、大きな社会問題となっている。認知症の治療法は研究途上にあるが、発症する前から検査や治療を始める必要があることがわかってきた。既存の医療スキームが通用しない分野で社会に貢献することを目指し、神戸大学は「認知症予防プロジェクト推進室」を設立、「予防」をキーワードに、研究から社会的実践までの取り組みをスタートさせている。



港湾都市・神戸の美しい風景を眼下に一望できる「神戸大学百年記念館」。狩野忠正工学部建設学科教授(当時)の設計により、2000(平成12)年末に竣工、翌年1月に竣工記念式典が挙行された。当館は、神戸大学創立九十周年記念事業の寄附金による「神大会館」と、国費による「留学生センター」(現在の国際教育総合センター)を3階部分でジョイントして一体的に建築された複合建物であり、本学が2002(平成14)年に創立百周年を迎えることから百年記念館と命名された。建物中央のプラットフォームには、外に大きく開かれた空間と幅21mの大階段があり、ここから眺める四角く切り取られた風景は、まるで1枚の絵画のようである。さわやかな風が通う雄大かつ洗練されたこの眺望は、2001(平成13)年に「神戸景観・ポイント賞」を受賞した。

「Bird's Eye」。これが設計者の狩野先生による当館建築デザイン「計画コンセプト」であった。狩野先生の説明によれば、建物全体の形は、鳥が「今にも飛び立とうとしている」一瞬の姿であり、屋上に突出する六甲ホルの楕円計の屋根は「鳥の頭であり目」なのだ。「渡り鳥は国から国へと往来する言わば鳥達の国際交流」ゆえに国際交流拠点という当館の建築目的に添ったものだという。キャンパス南端の丘より飛び立つ鳥をイメージした当館は、狩野先生の代表作となった。



百年記念館から神戸港を臨む

狩野忠正先生と百年記念館



狩野忠正先生(2001年)

狩野先生は、1962(昭和37)年に本学工学部建築学科を卒業、(株)竹中工務店に入社して優れた建築作品を次々発表し、1981(昭和56)年三輪そうめん山本本社の設計により吉田五十八賞を受賞。設計部長、プリンシパルアーキテクトを歴任し、1995(平成7)年退職して大阪とベルリンに狩野忠正建築研究所を設立した。1997(平成9)年本学工学部建設学科教授に就任し、教育者として建築設計教育や学生指導に尽くすとともに、建築家として工学部教室棟1階の学生自習室「スタジオ1」、工学会館1階喫茶食堂エコー(現在セブン-イレブン)の屋外テラス「スタジオ2」、さらに代表作「神戸大学百年記念館」を設計し、本学キャンパス空間の質を高めた。2001(平成13)年停年退官。本学への多大な貢献が評価され、それまで学外の著名人に授与されてきた「神戸大学名誉博士」の称号が、特例として初めて学内者の狩野先生に授与された。同年大阪芸術大学教授、2006(平成18)年もう一つの代表作「天満天神繁昌亭」が完成する。2018(平成30)年5月逝去(享年80歳)。心よりご冥福をお祈りする。(大学文書史料室 室長補佐 野邑 理栄子)

Contents

[特集1] 認知症予防の先進大学へ！	03
[特集2 神大研究ズームアップ] 実証データに基づく日本の教育改革を目指して	08
[神大生の挑戦] 頑張る神大生に全力の応援を。応援団男子リーダー復活	12
[KOBE教育] 持続可能な社会づくりの実践者を育む[ESDコース]	14
[キラリ神大 OG・OB] 微熱のような青春の日々を描く	16
[神大×LOCAL] 起業・継業する人材を育成、篠山からイノベーションを起こす！	18
[こんにちは！留学生です] スロベニアからの留学生	20
[国際ニュース] / [留学だより]	21
[神戸大学基金だより]	22
[Mini News]	23

表紙写真：百年記念館(六甲台第2キャンパス)

この建物は大学創立100周年を記念し、学術交流の進展に寄与する施設として設立された、神大会館と国際教育総合センターからなる建物です。六甲ホール、大学文書史料室、誓子・波津女俳句俳諧文庫、展示ホールが入ります。カメラ:二村海



認知症予防教室から 広がる研究展開

神戸大学の「認知症予防プロジェクト推進室」には、保健学研究科、医学研究科、人間発達環境学研究所、システム情報学研究所、学術・産業イノベーション創造本部などが結集し、文理融合の研究が進められている。また、その成果を事業化し、継続的な社会貢献につなげる取り組みも同時進行している。総合大学の強みを生かしたプロジェクトの全貌について、保健学研究科の古和久朋教授に聞いた。

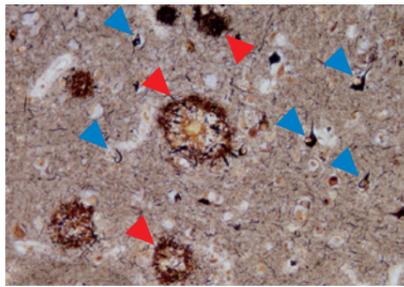
根本的治療薬が望まれている 認知症

——日本の認知症研究の現状は？
まず多いのは、薬による治療スキーム、いわば「症状が出たので病院へ行く、診断に基づいて投薬が始まり、その結果症状が消えて治る」という流れを旨とした研究です。認知症の研究はかなり進んでおり、最も患者数の多いアルツハイマー型認知症についても、発症に至るプロセスはかなりわかってきています。そして、認知症の原因となる、脳内に溜まる「老人斑」を取り

除く薬の研究も進んでいます。老人斑の構成タンパクに対する抗体を投与すると、老人斑がある程度取り除かれることは、マウス実験で証明されているし、人でもほぼ間違いのないでしょう。しかし問題は、発症してからではその薬の効果が証明されないことが、ここ10年の治療で明らかになってきたことなのです。

——症状が出てからでは遅い？
そうですね。患者は症状が出てから病院に来るので、それから投薬を始めても遅い。そうすると、「脳の中に老人斑が溜まり始めていなければならない

■アルツハイマー病の脳内でおきている変化



▲老人斑アミロイド(Aβ)
▲神経原線維変化(リン酸化タウ)

実施できれば、薬の効果が見込める人を見つけていくことができる。しかし、アミロイドPETには1回数十万円もの費用がかかるので、現実的には難しい。それでは今、何をすべきか。高齢者を中長期的に観察できる場所や集団を作って、スクリーニング(※1)を通じてふるいにかけた上で、残った人にアミロイドPETを実施し、陽性だけれど未発症の人に薬を投与する、という流れを作る必要があります。

——将来確立されるであろう薬が使える治療スキームを、薬の研究と同時進行で準備していく？

その通りです。そのためには、高齢者にこうしたことを理解していただきながら、定期的に認知機能を調べることができる場を作らねばなりません。そのために私たちは、認知症予防教室を実践しているのです。

神戸市民にコグニケアを提供

——認知症予防教室とは？
認知症予防教室(以下、教室)は、運動や認知機能の訓練に加え、病気のリスクや生活習慣の改善について学び、実践していただく場です。コグニケアといって、予防に効果があるとされるものに多面的に取り組みプログラムを実践しており、定期的な有酸素運動、運動しながらしりとりをするといった二重課題、社会性のつながりの維持など、神戸大学の研究者が考案したプログラムで構成されています。それらを参加者に実践してもらいながら、認知機能を測るいくつかの指標を年1回測定して、結果を参加者に伝えるしくみを作っています。

一方で、この取り組みには、認知機能の変化を評価する方法の確立という研究的側面もあります。発症前の段階で認知機能の変化を評価するために、「日本人の正常な経過」のデータ、いわば標準値が必要です。教室の参加者のデータを評価し、そこから標準値を分析できれば、個々の参加者の変化を標準値と比較して評価できるわけです。

教室の展開はいつから？

2018年7月から、神戸市北区の介護付き有料老人ホーム「神戸ゆ



大学院保健学研究科 リハビリテーション科学領域 教授

古和 久朋 KOWA Hisatomo

1970年東京都生まれ。1995年東京大学医学部医学科卒。2004年同大学院医学系研究科修了。2005年よりマサチューセッツ総合病院アルツハイマー研究ユニット留学。2008年東京大学神経内科特任助教、2010年より神戸大学医学部附属病院神経内科講師、2012年より神戸大学大学院医学研究科神経科学准教授。2017年より現職。神経内科専門医、認知症学会専門医。

うゆうの里」で、75歳以上の入居者20人の参加を得てスタートしています。週1回、60分間のプログラムで、参加者は有酸素運動や、エアロバイクをこぎながらの二重課題などに取り組み、食生活などさまざまな指導を受けることができます。施設の性格上、長期間のフォローが可能ですので、10年間の継続を目標にしています。

また、10月からは神戸新聞文化センター(KCC)の特別講座として、ヨガをベースにした教室を開いています。参加者の年齢は53〜89歳。ヨガの先生方にも認知症予防をご理解いただき、コグニケアを実践していただきます。今後はダンスを取り入れるなど、都度新しいことを提供し、飽きずに継続できるプログラムにしていきたいです。

(※1) 疾患の自覚がない潜伏期の人が含まれている可能性がある集団を対象に共通の検査を行い、罹患を疑われる人や発症が予測される人を選別すること。

幅広い研究領域から、認知症予防にアプローチ

ITを駆使して認知症を早期発見

都市安全研究センター
大学院システム情報学専攻 情報科学専攻 教授

滝口 哲也 TAKIGUCHI Tetsuya



高齢者の普段の生活状況から、認知機能の変化をさりげなく察知して、認知症の早期発見につなげる、そんなシステムが認知症予防教室で稼働しています。AIスピーカーなどを使い、高齢者がAIスピーカーに話しかけた声の調子、リズム、話す内容、動作、仕草、表情、視線など、いろいろな情報をセンサーで収集し、そこから認知機能のレベルを推定していきます。

これは、私が以前から研究している自閉症児の判定システムを応用したものです。子供が遊んでいるときの声から、健常児と自閉症児の声のパターン、ピッチや抑揚などの違いを、コンピュータで分類・解析する研究で、就学前の段階で自閉症児であることがわかれば、その子に合わせた教育プランを提供することができるのです。

認知症予防への応用は始まったばかりですが、いま教室に参加されている皆さんは健康ですし、将来発症するかどうかはわかりません。ひたすらデータを蓄積しながら、数年後に症状が出た場合に、その人の過去のデータに遡って検証していくという難しい研究になります。しかし、認知機能の検査には抵抗を感じる人も多いので、「さりげなく」判定できるシステムの研究はとても有意義だと思います。

これは夢ですが、将来的には認知症を発症した人の回復を支援できるシステムも作りたい。一般的に困難とされる認知症患者とのコミュニケーションを、AIやロボットが支援するシステムができれば、周囲と楽しく話せるかもしれません。人は喋ることによって生きがいも生まれてくると思うので、ぜひ実現したいですね。



人との豊かな関係づくりが予防に有効

大学院人間発達環境学専攻 人間発達専攻 教授

近藤 徳彦 KONDO Naruhiko

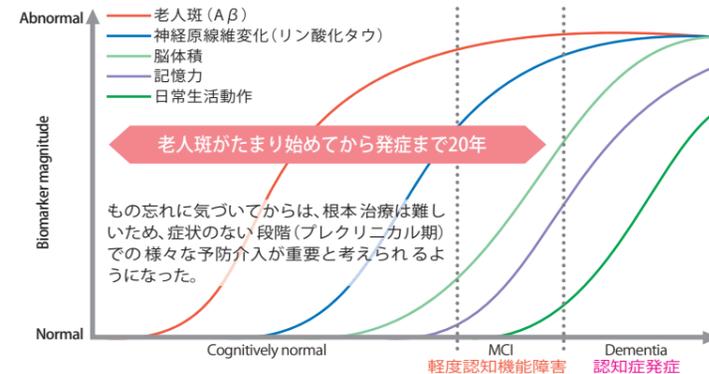
2015年にアクティブエイジング研究センターを立ち上げ、高齢社会の問題解決を目指し、心と身体と社会という3つの局面から研究を進めています。認知症の問題には社会科学の方面からアプローチし、社会的なネットワークがもつ機能を、認知症予防に応用しています。

私たちは神戸市灘区の鶴甲団地でコミュニティの活性化に取り組み、その影響を調査してきました。鶴甲団地は高齢の住人が多く、若い人たちも入ってきていますが、人付き合いや世代間交流の少なさから、さまざまな問題が生じていました。そこで住民同士のつながりを強化するプロジェクトを進めた結果、コミュニティが持つパワーが明らかになりました。たとえば、住民の健康増進において、肥満対策や禁酒・禁煙をするよりも、人との関わりを持つことの方が重要なファクターであることがデータで裏付

けられました。地域社会に安心感が増し、出生率が上がる場合もあります。コミュニティはさまざまな問題解決の鍵なのです。

認知症についても、社会的なネットワークを豊かにすることで罹患率が低下するとのデータがあります。これを認知症予防教室のプログラムに取り込み、名札を作って互いに名前を呼び合うようにし、話し合う時間を設け、イベントを行っています。同時に、システム情報学専攻の協力を得て、ネットワークがどう変わるかを解析しています。

心と身体と社会という3つの面で、参加者の日常生活を把握し、そのデータを蓄積・解析することで、認知症のリスクを低減できる生活スタイルを具体的に示すことができるようになるでしょう。こうした観点からも、予防の方法を見つけたいと考えています。



— 今後の展開は？
教室を開催する場所として、スポーツジムやカルチャーセンターとの連携を進めています。介護施設の入居者だけでなく、自宅で生活する高齢者にもプログラムを提供するためです。また、県立病院との取り組みも準備中です。認知症のリスク要因である高血圧、糖尿病などで定期的に通院する患者さんを中心に、私たちのプログラムを、病院の施設で提供する展開も考えられます。自治体の協力が得られれば、プログラム

— オール神戸大学のプロジェクトに
教室を事業化する構想も？
認知症予防には長期的に取り組まないという意味がありません。研究費頼みの運営ではなく、事業化して継続できるようにしないと、社会貢献になりません。営利目的ではなく、運営コストに見合うだけの最低限の利益を出しているよう、学内の専門家の助言も受けています。
— 神戸市とも認知症予防の取り組みを？
神戸市が2018年4月に制定した「認知症の人にやさしいまちづくり条例」に基づき、WHO（世界保健機関）神戸センターと共に、認知症発症リスクを推測するための指標を作る研究などを行っています。対象者が4万人を超える、かなり大規模なもので、回答者がその後認知症になったかどうかは、神戸市に提供してもらった介護保険の認定調査データ（個人名がわからないように処理済み）と組み合わせ検証します。
— このプロジェクトに、神戸大学のOB・OGや学生も参加？
11月からOB・OGを対象とした教室を開催します。学生に向けては、認知症教育のカリキュラムを準備中で、ここには、認知症のリスク

ファクターを明確にする研究への参加という目的もあります。認知症の原因になる老人斑の病理学的な変化は、発症する20年も前から起きていますから、それより前の、若い頃の生活の仕方などにも、将来老人斑を蓄積しやすくするリスクになる要因があるかもしれない。そこで、神戸大学に在籍している学生や教職員に、アンケートへの協力や採血サンプルの提供など、研究への協力を呼びかけていきます。長期的なリスクの探索と評価を目指す上で、全学共通の認知症教育という視点が重要になります。研究者だけでなく、大学の職員、学生を含めた全員が意識を



認知症予防教室でコグニケアを提供
認知症の予防にフォーカスし、社会貢献と研究を同時に進める神戸大学のプロジェクト。認知症予防に多面的に取り組むコグニケアを提供しながら、参加者の認知機能を定期的に測定し、必要であれば病院での治療につなげていく。写真は神戸新聞文化センターで開催されている教室のもよう。
※詳しくは、ホームページでも参照ください。▶ [コグニケア](#) 検索

高め、理解を深めることで、認知症予防先進大学を目指していきたい。
オール神戸大学の文理融合の研究テーマに、認知症予防はふさわしいと思います。
— 大学が一つになり、構成員全員の利益になる。素晴らしい試みです。
社会貢献としての教室を実践しながら、そこからいろいろな学問が発展すれば、大学のプロジェクトとして大変有意義です。このプロジェクトに前向きに参加すれば、全学との関わりを持つことができるので、学生にも積極的に参加してほしいですね。

学際的視点で研究する子育てと幸福度の関係

実証データに基づく日本の教育改革を目指して



interviewee
西村和雄
NISHIMURA Kazuo

社会システムイノベーションセンター 経済経営研究所 特命教授

1946年札幌市生まれ。1972年東京大学大学院農学系研究科博士課程農業経済学専攻進学、1976年米国ロチェスター大学大学院経済学研究所博士課程修了。1987年京都大学経済研究所教授、2006年同研究所所長、2008年サンタフェ研究所特任教授、2010年京都大学名誉教授、京都大学経済研究所特任教授(京都大学学際融合教育研究推進センター統合複雑系科学国際研究ユニット代表を兼務)を経て、2013年より現職。2012年紫綬褒章受章、日本学士院会員。

日本人が抱く幸福感には所得、学歴よりも「自己決定」が強い影響を与えていることが、国内2万人に対するアンケート調査で明らかになったと、本学の社会システムイノベーションセンターの西村和雄特命教授らのチームが発表した。

西村特命教授は、1980年代に米国で経済学の教鞭を執り、経済成長モデルにおける人的資本の役割を数理的に研究してきた。アメリカで、並行して心理学を研究してきた経緯から、最近では、学際的視点で人的資本の蓄積に関する実証研究に取り組んできた。「人的資本は蓄積可能であり、経験や教育がもたらす」と話す西村教授。日本の教育に影響を与える実証研究について、話を聞いた。

教育の質が日本経済に影響を与える

先生の学際研究について聞かせてください。

私のメインとなる研究は、数理モデルで人的資本が経済成長にどう影響するのかを分析することです。しかし、数理モデルでは教育の中身を具体的に表すことはできません。学際的・実証的に教育を研究する時には、抽象的な議論ではなく、具体的な問題を研究しています。

例えばどのような問題が？

日本経済が抱える課題の一つに、労働生産性の低さが挙げられます。これは日本の教育が効果を上げていないことが原因。解消するためには、教育の質を上げるしかありません。まず、学生の学力調査が必要でした。

「分数ができない大学生」という本でも紹介していますが、1998年に慶應義塾大学の戸瀬信之教授と共同で、4月に有名大学に入学したばかりの1年生に数学の学力テストを実施しました。当時「生きる力」といった抽象的な教育方針で隠れている学力低下の実態を明らかにすることができました。

この調査を皮切りに、実証研究で具体的な事柄をデータで検証することを始めました。文系学部出身者で大学受験の際に数学を選択した人と、していない人を比較したところ、数学を選んだ人の方が高所得で、さらに転職にも有利だという結果が得られました。

また、当時、理系学部よりも文系学部卒業生の方が所得は高いという説がありました。文系・理系学部出身者で所得を比較して、通説を検証したところ、理系の方が所得が高く、理系科目のなかでは物理を得意とした人が最も高所得という結果となりました。研究を発表することで、理数系科

目が軽視されていた風潮が少しずつ変わっていききましたね。

——実証データにより真否を明らかにしたことで、教育に良い影響を与えたのですか。

学生の次は、日本の研究・開発力の低下を検証しました。日本企業の技術者の学力を調査すると、中学入試レベルの数学・物理の問題の正解率が6割を切る結果に。さらに年代別に特許申請数・更新数を調べると、80年・90年代の第一次・第二次ゆとり教育を受けた世代から、一人あたりの特許数が急激に減少していたのです。教育の影響が顕著に表れていました。これらのデータをもとに、学生にどんな教育を行っていくのかを、議論する必要があったと感じています。

子どもの幸福度は親の子育てに左右される

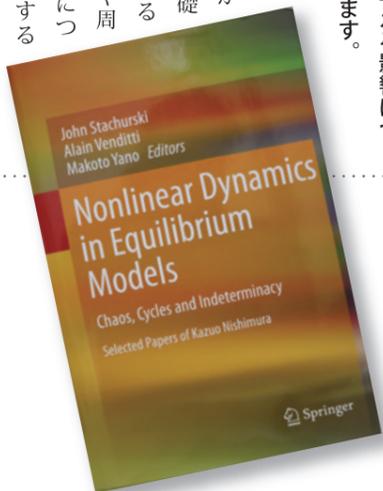
先生の子育てが与える影響についても研究をされています。

よく、日本では「学力よりも道徳が大事だ」という風潮があります。道徳の基礎となる規範を見つづけるために、幼少期に親や周りから言われた言葉について調査しました。すると「①うそをつかない②人

に親切にする③ルールを守る④勉強をする」の4つに行き着いたんです。特に、この4つのしつけを受けた人は高所得・高学歴の傾向が見られました。

——今回の子育てと幸福度についての研究はとても興味深いものでした。

いつの時代でも、親が望むことは子どもの「幸福」です。それが子育てのゴールであると言えるのではないのでしょうか。しかし、幸福は千差万別。人が幸福を感じるために必要な要素を、数万人のアンケートで調べると、健康と人間関係を別にすると、「自己決定」が一番幸福に影響を与えていることがわかりました。そして、子育て型と社会的成功の調査では、自立を促す「支援型」の子育てを受けた子どもが、成人した後に



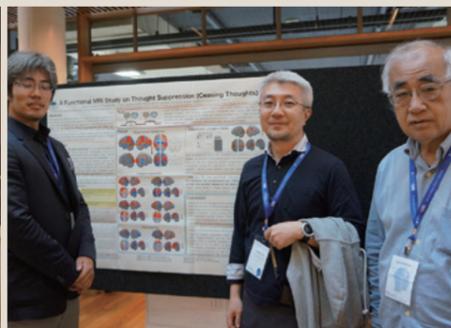
Nonlinear Dynamics in Equilibrium Models (Springer社、2012年)は西村教授によるChaos, Indeterminacy, Cyclesに関する主要論文集である。



2017年パリでの国際学会の出席者と一緒に



2016年理数科教育の国際学会を主催して、ノーベル物理学賞受賞者の小林誠教授と



2015年Queensland大学での意識の国際学会に出席して発表する



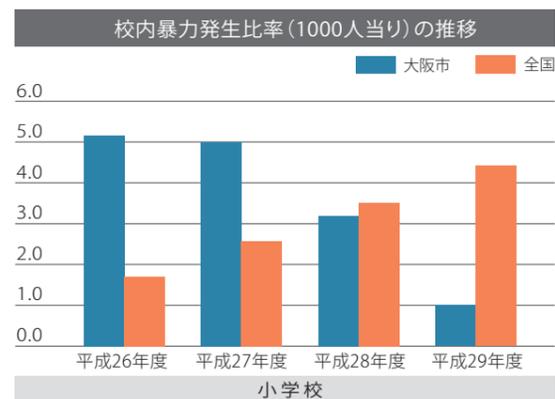
2007年数学の国際学会で、カオスで有名な Sharkovsky教授(向かって左から二人目)と



2007年 フランスで名誉博士号を受ける



2005年中山文部科学大臣にゆとり教育の学習指導要領の見直しを求める署名を提出

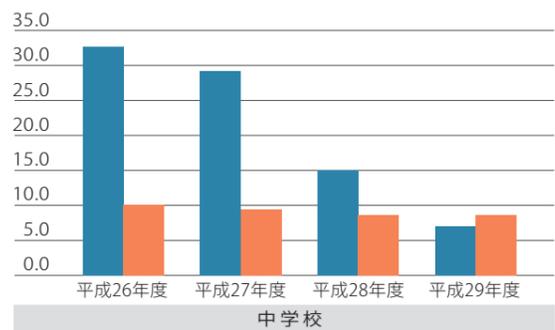


驚異的ですね。一体どんな取り組みを？

大阪市は、2015年11月から公立のすべての小・中学校に「学校安心ルール」を配布しました。「ずる休みをする」、「他の子を仲間外れにする」などと、してはいけないことを段階に分けて、詳しく明示。破った場合の対応についても表にしました。子どもたちが、してはいけないことを自覚したうえで、自らを律することができるよう促すことを目的としました。記載している内容は、人として当たり前のこと。あらかじめそれを明示することが大切なのです。

— 学力向上については？

これまで私が実証してきた重要な科目を子どもたちが効果的に学習するた



め、教員の指導力向上に取り組んでいます。まず、私が、国語と算数の学習の拠所を提示して、それをしてに、授業改善の原案を作ります。私があらかじめ作った原案をもとに、教育委員会が国語と算数の指導用マニュアルを作成して、ベテランの指導教員が、それをもって、大阪市内のモデル校30校をまわり教員に指導をします。評判はとても良いですよ。現場の先生は自信が付き、子どもたちは授業が楽しくてよくわかるからです。将来的には、モデル校から市内の全公立の小学校に取り組みを広げていきたいですね。

将来的に、人は一人ひとり皆違うということを明らかにしたい。そうすれば、学習障害児という存在も生まれなかったと思いますし、全体の教育のあり方ももう少し変わるのではないかと考えています。ハードルは高いですが、最終的には個別学習、自主学習を実現したいですね。

— 実現に向けての課題は？

指導するベテラン教員が不足していること。雇用には予算はかかりますが、スキルや時間の面でも、定年退職された教員に指導にあたってもらうことを検討しています。来年の4月には国語・算数のほか、理科の教員指導も始める準備を進めています。

また、ゆくゆくは学習障害児の学力向上にも取り組むたいと考えています。これまでに「学ぼう！算数」という著書をもとに、東京・京都の学校で、できる子を伸ばすのと同時に、学習障害児を学力アップに導いてきた実績があります。だからこそ、大阪市内でも実現したいと考えています。

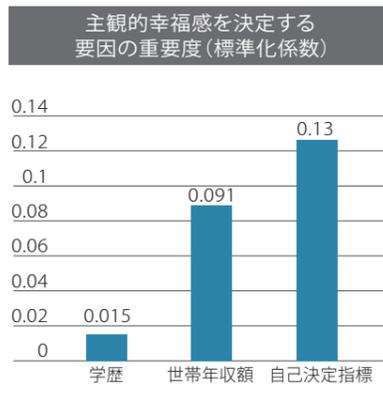


右手前:「分数ができない大学生」学生の学力低下に警鐘を鳴らした一冊。2005年、日本数学会出版賞受賞。
左から:「学ぼう!算数シリーズ」算数の「考える力」を養えると定評がある。

～子育て、学習方法、幸福度～ 実証研究が一つにつながって

す。私は今、大阪市の教育委員会の顧問を務めているのですが、大阪府は安全と学力の向上を2大重要目標として、取り組みを進めています。

安全については、2014年度まで大阪府は小・中学校ともに校内暴力の発生率が全国平均の3倍以上、全国でも最多という状況でした。それが昨年度までの3年間で5分の1に減少し、17年度は前年の2分の1まで減少。全国平均値を下回るようになりました。



注) 学歴は説明変数として統計的に有意ではない。

頑張る神大生に全力の応援を。 応援団男子リーダー復活

応援団総部リーダー
経営学部経営学科3年

宮脇健也
MIYAWAKI Kenya

今回は「応援団」を復活させた経営学部3年の宮脇健也さん取材しました。一緒に奮闘する応援団総部吹奏楽部の松田大地さん(法学部3年)にも話を聞き、応援団復活までの経緯や、そこに秘められた思いなどを探ります。

—— 応援団に入部しようと思ったきっかけを教えてください。

宮脇 僕は神戸大学に編入学したのですが、入学前に神大の雰囲気を知りたいと思い、アメリカンフットボール部レイバングズの試合を観戦しました。そのときに、「応援団がない」と気づいたんです。神大くらいの規模の大学では、応援団があるのが一般的です。ネットで調べたところ、神大では「応援団」と「吹奏楽部」が「応援団総部」として活動していたけれど、3年前に応援団の部員がゼロになってしまったということを知りました。

その時は「復活してほしいな」と思っただけだったのですが、入学後、どうなったのか気になって、新歓祭で応援団のブースに行ってみました。そこで、体育会の部活や吹奏楽部、応援団のOB・OGの方が一丸となって、復活に向けて



応援団総部吹奏楽部 応援団担当
松田 大地 MATSUDA Daichi
法学部 法律学科3年

奮闘されていることを知りました。最初は自分が入部しようとは思っていませんでしたが、OBの方や吹奏楽部の応援団担当の松田さんの話を聞く中で、皆さんのサポートを受けながら、応援団復活という大きなことをやってみたいと思い、入部を決めました。

—— 様々な人が、応援団復活に向けて活動されていたんですね。きっかけは何だったのでしょうか？

松田 去年の体育会の幹事長の加瀬さんという学生が、大学の学生支援課に「応援団の復活はできないのか」と話をしに行ったのがきっかけです。学生支援課から応援団総部吹奏楽部の僕たちのところへ話が来たのですが、体育会の人たちから「自分たちを応援してほしい」と言ってもらったら、それは断れないですよね。ぜひ力になればと思います、僕たちも復活に向けて動き出しました。

—— 復活にあたって、大変だった点はありますか？

宮脇 一番大変なのは、文化の継承をどう考えるかということです。応援団がな

くなってしまう理由としてOBの方が「残すべきものを残せなくて、変わるべきところを変われなかった」と仰るんですね。限界を超えてプレーする選手たちを応援するのだから、僕たちも限界を超えないと応援にならないと思っていて、そのためには多少の厳しさに耐える訓練は必要です。応援団員としての自覚を常に持つておくことも必要だと思います。しかし、そればかりを重視して、今の学生がついてくることが難しくなっていました。ところが、応援団がなくなってしまった一因であると思います。

多様なキャンパスライフがある現代において、4年間、24時間365日応援団漬けの生活を送るなんてことは相応しいとは思いません。オン・オフをしっかり分け、応援団としての活動以外のことも大学生活を充実させられるよう、ルールも文化も改めて作り直しをしようとしています。

松田 吹奏楽部の方でも、今の部員は応援団があった頃を知らないのです。どういう風に応援をしたいのか分からない人が多くて。復活にあたり、どうすれば吹奏楽部のメンバーも楽しんで応援ができるのか、以前あったルールで何を残し、何を变えるべきかなど、考えることが多かったです。

—— 宮脇さんが思う、応援の魅力は何ですか？

宮脇 大学で一緒に勉強している仲間と「ともに戦える」ことが応援の魅力・やり

がいたと思います。プレーしているのは選手ですが、それを全力で応援していたら、自分のことになるんです。例えば、選手がホームランを打ったら、まるで自分が打ったかのような気分になりますし、逆に相手に点を取られたり負けたりしたら、ものすごく悔しさを感ずります。

それと、応援のパフォーマンスって、結構面白いんですよ。例えば野球の応援だと、マーチに合わせて指揮を振ったり、得点を取ったら肩を組んで神大の第三応援歌である「燃ゆる思い」を歌ったりして、すごく楽しいです。

—— 最後に、神大生や、神大を目指す受験生に向けて、応援メッセージをお願いします！

宮脇 自分が頑張らないといけない時、応援してくれる存在というのは誰にでもいると思うんです。そういう時は、応援してもらってしっかり頑張る。そしてその後、今度はぜひ、誰かを応援する側に回ってほしいと思います。

高校生の方は、受験勉強は苦しいと思いますし、長丁場ですが、「何のため



■インタビュー学生広報チーム
藤田 奈菜子 FUJITA Nanako
経営学部 経営学科3年



ESDコース
履修生の声

Voice

—どのようなフィールドワークに参加しましたか？

門田：「えんぴつの家」という障害者の方の福祉施設が特に印象に残っています。そこで、障害者の方同士のコミュニティはあるけれど、地域の人との繋がりができにくいという課題があるのを知りました。障害のある方はすごく身近にいるのに、そこに積極的に関わろうとする人は少なく、コミュニティが隔絶されてしまっているんだなって。

朝倉：僕は「KFC（神戸定住外国人支援センター）」で、外国人の子もたちに勉強や日本語を教える活動をしました。経済的に厳しくて学校へ行けない子や、日本語が不自由で授業についていけない子がいるのですが、学校側の支援体制が十分に整っていないのが現状で…。また、彼らがマナーなどについて、日本人以上に厳しい目で見られることがあるのを知り、そういう偏見というか、差別的な現実があるのだと実感しました。

高須：私が印象に残っているのは、年末に三宮で行われている日雇い労働者の方たちのための「炊き出し」です。たくさんの方が来ていて、普段そういう方が三宮にこんなにいるのを意識したことがなくて、ああ、全然知らなかったなあって。

高松：やっぱり、現場に行く機会がたくさんあるのがいいなと思います。「ESDスタディーツアー」というのがあって、ものすごく充実してるんですよ。ポータルサイトのカレンダーに、参加できるフィールドワークが載っているのですが、ほとんど毎日何かが行われているし、いくつでも参加できます。

—今はどんな授業を？

高松：今はESD演習をしています。自分たちで課題を決めて、先生も一緒になって自由にディスカッションをして、アクションを起こして…という感じです。分かりにくいESDをどうやって広めるかという課題を考えているんですけど、本当に難しくして(笑)。

高須：「ESDとは何か」って、よくディスカッションのテーマになるんですけど、なかなか答えが出ないんですね。

門田：あと、いろんな学部の先生が来て、それぞれの分野からみたESDの話をしてくれたりするのですが、聞いていて「これとこれは衝突してるな」と思う時もありますね(笑)。やっぱり、どの立場から見ても正しいESDというのは実現できるものではなくて、そういう衝突があることをちゃんと分かっておくことが大事なんだなと思います。

朝倉：それくらいESDは範囲が広いし、捉えることが難しいんだなと。だから、「これぞESD」というのを言い表すのは無理でも、それぞれのESDを感じて考えるのが重要なんだと思います。

—ESDコースを受けてみて、今後それをどういう風に生かしていきたいですか。

高松：ESDという視点を持ったことで、これまで関わらなかったような人たちと交流する機会が増えました。ESDを広めたいという思いがあるので、そのためには自分たちがまず知らないといけないから、もっといろんな人と繋がって行って、自分たちの学びにしていきたいと思っています。

高須：ESDを学んで、「片方が良くて、もう片方は良くない」ということを考えるようになりました。フェアトレードの活動をしているのですが、これにも環境への負荷の問題があったりします。1つの方法だけではなくて、いろんなアプローチの仕方を考えていけたらと思っています。

門田：いろんな立場の人の話を聞いて、その人の目線からも考えるのが本当に大切だと実感しました。そのためにはやっぱり実際に現場に行ってみないと分からないことがたくさんあるので、これからも積極的にESDの現場に関わっていききたいと思っています。

朝倉：これから奉仕活動を考えるときや、社会に出て何かプロジェクトなどを企画するときに、自分と違う考え方の人がなぜそう考えているのか、その人の立場を理解することを大切にしたいと思っています。自分と相手のメリットをしっかりと考え、周りの人たちが社会・環境への影響まできちんと考えて行動していきたいです。



- 国際人間科学部2年(右から)
- ・門田 菜奈 (もんでんなな) グローバル文化学科
 - ・高須 楓 (たかすかえで) グローバル文化学科
 - ・高松 秀徒 (たかまつしゅうと) 環境共生学科
 - ・朝倉 崇瑛 (あさくらたかあき) 環境共生学科

持続可能な社会づくりの実践者を育む

[ESDコース] Education for Sustainable Development

ESD (Education for Sustainable Development) は、「持続可能な開発のための教育」と訳されます。神戸大学には、全ての学部の学生が一緒に学び、環境、貧困、平和、人権、福祉、健康問題など、幅広い観点からESDを理解し、その推進者としての力を形成するためのコースがあります。



担当教員 松岡 広路 MATSUOKA Koji
大学院 人間発達環境学研究所 教授

— ESDとはどのような取り組みなのでしょう。実はそれは、とても難しい質問です。「持続可能な開発のための教育」と訳されますが、何が持続可能なのか、教育とはどのようなことなのか、非常に幅広い捉え方ができます。

「持続可能」ということについては、地球資源や我々の今の社会生活が持続することも大事なのですが、それだけではないですよね。自分の国のことだけを考えていてもいけないし、人間以外の生き物や、これから生まれてくる命のことも忘れてはならない。障害を持つ人や、被災地の人の暮らしのこともある。「あらゆる命」が持続可能な社会を作っていくというのが、持続可能な開発という運動です。これに関しては、国連が2015年に「SDGs (持続可能な開発目標)」というキーワードを作りました。ESDが分かりづらいので、具体的な17個の目標を設定したんですね。例えば貧困をなくそうと

か、海や陸の豊かさを守ろう、すべての人に健康と福祉を、などの目標があります。これらのどれかを選んで皆が動いてくれば、持続可能な開発が実現するのではないかといいものです。ですが、これは必ずしも衝突するんですね。あちらを立てればこちらが立たずという状態になる。例えば、「貧困をなくすために発展途上国を開発しようとしたら、その生き物の住処がなくなった」「みたいに。それは国連も当然分かっています。でも今の状況では、普通の人はそんな衝突に悩む段階までたどり着いていませんから、まずは好きなのところからアクションを起こしてもらおうということなんです。

そして、いずれその衝突が起きたところで、ESDの実践が重要になってきます。ESDの「Education」は、「コミュニティの中で人と人が絡み合っていて、その中で徐々に人が変化していくことを目指します。あらゆる命が持続していきけるような社会を目指して、異なる立場の人々がお互いに学び合っていくうちに、ふと気づいたら考え方が変化している。矛盾や衝突をみんなで引き受けながら、新しい調和を作りましょう」という実践がESDなんですね。

— ESDコースの特徴を教えてください。ESDコースでは、最初にフィールドを体験します。実際にESDを実践する人たちのいる現場へ行って、自分で何か問題を見つけてもらう。誰かがすでに発見したことを知って満足するのではなく、「あなたは自分で知識や理論の芽を見つけてくれますか？」ということや、我々は学生とともに聞きたいと思っています。ESDコースでは、始めのうちは、

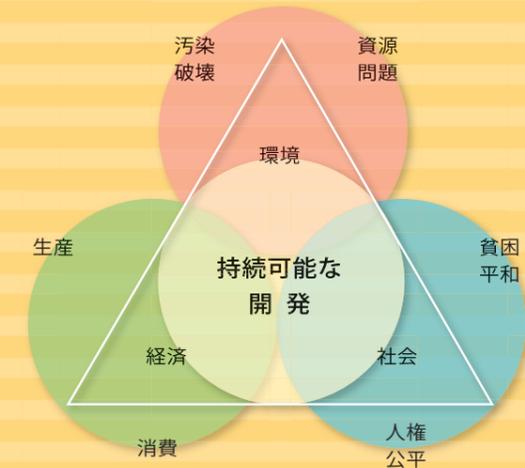
— どのような学生に受講してほしいですか？
いろんな分野・問題に関心のある人は、ぜひESDコースに来てほしいです。今の時代や社会について、何か変だなと思っていることがあるとしたら、その気付きはきっと正しいです。その小さな疑問は、社会を変えていく力になります。このコースで、様々な立場の人と関わりながら、新しい学びや新しい調和、小さな疑問が社会を変える力となるための仕組みを、ぜひ一緒に考えていきましょう。



フィールドワークにて現場を体験



ESD演習の様子



「環境」と「社会」と「経済」の調和のとれた社会づくり



「36.8°C」のワンシーン ©映画24区

「幸福のスイッチ」ワンシーン ©2006「幸福のスイッチ」製作委員会

微熱のような青春の日々を描く

どこにでもある、ささやかなものに光を当てて

兵庫県の加古川市を舞台とした、2018年7月公開の映画「36.8°C サンジュウロクドハチブ」。堀田真由さんが演じる女子高生・若菜と、その友人の仲良し三人組を軸に、やんわりとした物語が進んでいきます。監督・脚本を務めた安田真奈さんにお話を伺い、この映画の魅力や、安田監督が目指す映画のカたちについて探ります。

の第一弾です。地域の「食」や「高校生」とコラボした青春映画を市民参加型で作るという企画なのですが、加古川の方々がとても協力的で、エキストラを入れたら100人くらいの市民の方が出演してくれていますし、ロケハンから舞台挨拶まで協力していただきました。脚本作りの段階で、市民の方や高校生にヒアリングをしたんですけど、加古川の魅力を知ると、「姫路みたいに世界遺産もないし、神戸みたいに観光資源豊かじゃないし…」と遠慮されるので、面白いなと思って。それで、遠慮がちな若菜のキャラクターを思い浮かべました。高校生の話ですが、「アーと言えない日本人」的な普遍性のあるキャラクターが、幅広い年代の方に共感していただけました。

—— **おいしそうなお飯が印象的なシーンが多いですね。**

撮影の時期がイチジクとブドウのシーズンだったので、それを使って、「若菜がちよつと頑張ってた」という感じになるようフードコーディネーターの方に考えていただきました。加古川では、上映会とともにイチ



—— **大学時代は映画サークルに所属されていたのですか。**

はい、映画サークルRICK'Sに所属していました。最近では簡単に映像が撮れますが、当時は機材も高いし、30分の作品を撮るのにフィルム代と現像代で何万円もかかっていたので、みんな一生懸命アルバイトをしていましたね。サークル自体はゆるい感じで、飲み会だけに現れる人なんかも含めると、100人くらいメンバーがいました。



安田 真奈 YASUDA Mana <http://manafilm.web.fc2.com/>

映画監督・脚本家。奈良県出身、大阪府在住。神戸大学の映画サークルRick'sで8mm映画を撮り始め、約10年のメーカー勤務の後、2006年映画「幸福（しあわせ）のスイッチ」監督・脚本で劇場デビュー。上野樹里×沢田研二の電器屋親子物語。第16回日本映画批評家大賞特別女性監督賞、第2回おおさかシネマフェスティバル脚本賞を受賞。その後11年間は育児のため脚本業のみに。映画「劇場版 神戸在住」「猫目小僧」、NHK「やさしい花」「ちよつとは、ダラスに。」、毎日放送「奇跡のホスピス」など脚本担当。2017年映画「36.8°C サンジュウロクドハチブ」、2018年新作ドラマを監督・脚本。いずれもオリジナル作品。

ジクのクッキングイベントが開催されたり、ロケ地巡りツアーが実施されたりと、映画を活用していただいています。もともと、「市民が町の良さを再発見しよう」という目的で企画されたので、地元の方々に長く愛していただけたらいいなって、とても嬉しいです。

—— **タイトルも特徴的です。**

関係者で案を出しあいました。「36.7°C」という案が出て、「ええなあ、温度ちよつと上げよか」と決まりました。学生時代って、大半の子が、そんなに劇的なことは起こらず、毎日がちよつと嬉しかったり、ちよつと悲しかったり繰り返すんですよね。青春は微熱のような日々々々という意味を込めています。

私の代表作は、上野樹里さんと沢田研二さんが電器屋の親子を演じられた、映画「幸福のスイッチ」ですが、この作品も、大事件が起こるわけではなく、日常の家族の交流、仕事、親子の絆を描いています。どこにでもいる普通の人たちの、その人にとっての人生における大事な日、社会の大事件ではないけれど、個人の重大事であるようなものを描くのが、私は好きなんです。ささやかだけれど心に浸みるものに光をあてて、見た人が「あるある」とか「家族に会いたくなったわ」とか感じてくれたら嬉しいな…と思っています。

ちなみに、今年の夏も新作を撮ったのですが、それもマニアックな世界にいる普通の人たちに光をあてた、ちよつと面白い青春ドラマです。まだ詳しいことは言えないのですが、ぜひともご覧いただけたら嬉しいです。

私は2回生の頃から自分の作品を作るようになったのですが、初めは一発キヤグのようなものから撮り始めて、だんだんドラマも作るようになって。青春ものを撮った時に、周りから「良かったなあ」とか「じんと来た」と言われて、映画作りがやめられなくなったんです。

—— **神戸大学を卒業された後はどのような道に進まれたのですか。**

卒業後はパナソニック(当時は松下電器産業)に就職し、家電本部の販売促進部門に配



■インタビュー-学生広報チーム
清水 大貴 SHIMIZU Hiroyuki
工学部機械工学科2年

—— **最後に神大生や高校生にむけてのメッセージをお願いします。**

勉強する時間がたくさんあるうちに、いろんなことを吸収してほしいと思います。その時は苦手だなと思ってても、後の人生で意外な楽しみをもたらしたり、仕事に役立ちたりすることが必ずあるはずなので。また、自分が希望している道に進めなくても、「それで終わりだ」とみたくには考えてほしくないです。今、思っていたのと違うことをしていたとしても、きっと何か得るものがあります。私も、販売促進の経験があったので映画企画の売り込みができましたし、育児で11年間監督業を休みましたが、育児経験があったので児童虐待がテーマのNHKドラマ「やさしい花」の脚本を書くことができましたから。

そして、神戸大のような良い環境はなかなかないので、その価値に気づいてほしいです。加古川の市民の方と同じで、そこにいる時って、その場所の良さが見えづらいんですよ。神戸大の学部の多さや、異文化と交流する機会など、掘り下げていけば学べるものがたくさんあるので、ぜひ大いに活用していただけたらと思います。

この映画は、制作会社である映画24区が企画した「ぼくらのレシピ図鑑」というシリーズ

属になりました。仕事は忙しかったのですが、お盆の時期にまとめて撮影したりして、映画制作はずっと続けていました。社会人2年目の時に、ある映画祭でグランプリと観客賞をいただいて、「できたら、いつか仕事にしたいな…」と思って。

当時は女性監督も少なく、映像文化は東京が中心。とにかく映画祭に応募して足を運んで、プロデューサーの方にお会いして自分を売り込むしかなくて。販売促進部門での経験を生かして、死ぬほど営業しましたよ(笑)。

その甲斐もあって、テレビ局からドラマ制作の依頼をいただけて、会社との両立が難しくなったこともあり、退職して監督・脚本一本でやってみようと思いました。

—— **映画「36.8°C」について教えてください。**





SASAYAMA

起業・継業する人材を育成 篠山からイノベーションを起こす！

受講生の声



加藤 正美さん KATO Masami
前職：大手旅行代理店勤務。
航空・旅行業界に20年以上携わる。

キャリアを活かした起業に向けて
篠山ならではの
インバウンドツアーを！

私はこれまで、旅行代理店で外国人観光客向けのツアーを販売していました。自分の販売したいツアーだけをお勧めしたい気持ちが強くなり、起業しようと会社を退職。しかし、起業するための手段、ツアー企画の経験がないこと、拠点選び…等の不安があり、1年近く具体的な見通しが立たない状態でした。

今年2月に初めて篠山を訪れ、自然豊かな篠山の地に魅了される中、偶然、観光地でインバウンドツアーのモニターに参加したんです。起業への気持ちを再確認できた2ヶ月後、新聞広告でスクールの募集を知って受講を決めました。

授業では、各自の事業計画について受講生同士白熱した議論を交わっています。先生やスタッフの方の助言により、販売ターゲットやツアー内容など、起業プランが具体的になってきました。

またこの度、篠山市はインバウンドに力を入れるため、篠山口駅にある観光案内所を丹波篠山観光ステーションに一新しました。私はスクールを通じて声を掛けていただき、篠山市の非常勤職員として観光ステーションで、訪日観光客の対応と観光プロモーション活動に携わります。起業に向けての第一歩として実務に携わり、地域のネットワークをより広げていきたいですね。篠山は京都などと比べて観光資源を発掘できる余地があるので、篠山ならではのツアーを企画し、将来的には地域を巻き込んで事業運営をしていきたいです。

—— 継業とは何ですか？
経営継承のことです。担い手がいない事業を掘り起し、後継したい人にマッチングします。篠山の伝統産業から、日用品販売店など地域の生活インフラの事業までジャンルは幅広いですね。マッチングする前には、私たちが間に入って再編することが大切。事業やサービス内容、ネットワークなどを見直して整理すると、後継者が継ぎやすくなるのです。実際、他の地域で茶園の継業に成功した実例があるので、篠山でも実現したいですね。
継業は篠山を離れた方のUターンを促すねらいがあるとともに、したいことが決まっていないスクール生にも選択肢の一つとして紹介しています。
—— 受講後のサポートも充実していますね。
他の起業スクールとの差別化として、私たちは出口支援に特に力を入れています。

受講後にすぐに起業できる人には、開業資金の調達や物件探しなどの仲介もしますし、起業1年目のスタートアップとして、篠山市の地域おこし協力隊に推薦もできます。篠山市は学生でも協力隊になることができます。学業と協力隊の活動を両立できるように勤務時間は2分の1。移住の受入れ口が広いのも特徴ですね。
—— 受講生について教えてください。
20代は割と少なく、30〜40代がボリュームゾーンです。50〜60代の方も何人かいらっしゃるようです。起業する方向性は決まっているけれど、具体化していない、見直したいという方が多いですね。勉強するだけのために来る方はおらず、何かアクションを起こしたいと目的を持った方ばかりです。
カリキュラムは時勢も考慮しながら、民泊、商品企画など、篠山で起業してほしい分野を中心に選び、農業と組み合わせたい

ビジネスに展開できる内容になるよう心掛けています。
—— 今後の展望は？
今年の秋から東播磨にも同様に拠点を設け、兵庫県と神戸大学を含む3大学で地域振興に向けて取組みが進行中です。私は地域振興には拠点づくりが欠かせないと考えています。篠山もスクールの開催で、毎年30人近くが他の地域から集まっていることも、一つの成果です。フィードバックとインバウンドラボ、二つの拠点が連携して研究と人材育成を進めていくことが大切だと思います。
これまで3年間で92人の受講生のうち、17人が実際に起業を果たしました。受講生が増えることが、イノベーションを生む可能性を高めると思っていますので、少なくとも10年以上はスクールを継続していきたいです。

神戸大学は農学部の前身となる拠点を置くなど、兵庫県篠山市と長年関係が深い。2007年には地域連携協定を結び、研究や学生の人材育成の拠点「篠山フィールドステーション」を開設。16年に開設した「神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ」では、起業・継業のためのローカルビジネススクール「篠山イノベーターズスクール」を運営している。今回、4期目を迎えるスクールを運営する、中塚雅也准教授に話を聞いた。

—— 篠山イノベーターズスクール設立までの経緯は？
篠山市と神戸大学の連携協定当初から、私は地域政策の立案などに関わってきました。委員長を務めた「篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の一環として、移住・定住促進のプログラムを作りたという市の要望を受けて、篠山イノベーターズスクールを開始しました。

—— 地域人材育成の環境としてスクールが？
そうです。地域の人材育成に学生と社会人の両輪でアプローチします。学生向けには2006年から「食農こープ教育プログラム」をスタート。農業の知識を座学で学び、農家で農作業に従事しながら、課題の発掘や解決に向けた提案を1年で考える「実践農学入門」、課題の解決にまで導く「実践農学」の2本立てです。この授業から農業サークルなどの学生団体が生まれ、大勢の若者が篠山で活動しています。
16年10月から開講した篠山イノベーターズスクールは、社会人向けの1年間のプログラムです。講義型の「セミナー」では農村ビジネスを行うための知識を深めます。そして、地域ビジネスの実践者を講師に招き、実際のプロジェクトに携わる「CBL (Community Based Learning)」という授業で、より実践的なノウハウを学ぶことができます。受講後は篠山での起業や継業を目指します。



農学研究科 准教授
神戸大学・篠山市 農村イノベーションラボ
ディレクター

中塚 雅也

NAKATSUKA Masaya

1973年生まれ。神戸大学農学部卒業。緑地設計コンサルタント、(財)丹波の森協会等にて地域づくり実務に携わりながら、2004年 神戸大学大学院自然科学研究科 博士後期課程修了、博士(学術)。神戸大学助教、英国ニューカッスル大学農村経済センター(Centre for Rural Economy)客員研究員などを経て、現在、神戸大学大学院農学研究科食料環境経済学講座 准教授。農学研究科地域連携センターを統括。専門は、農業農村経営学、農村政策、農村計画。

ブリュッセルオフィス Kobe University Brussels European Centre

神戸大学は、本学のパートナーであるブリュッセル自由大学(蘭語系)内に、神戸大学ブリュッセルオフィスを設置しています。国際機関の本部が多く置かれ、ヨーロッパの首都機能を果たしているベルギー・ブリュッセルで、欧州の諸大学や研究機関との学術・研究交流の促進、留学生・研究者ネットワークの構築など、国際連携拠点として、様々な活動を行っています。
<http://www.office.kobe-u.ac.jp/ipeip/kubec/about.html>

ブリュッセルオフィス Special Report
 「ヨーロッパの首都」
 ブリュッセルより

国際シンポジウム開催

10月24日に、第9回となる国際シンポジウムを開催。日本及びEUの政府関係者、研究者、学生、ビジネスパーソンなど120名を超える参加がありました。

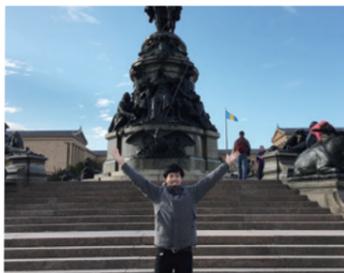
オフィスでは2017年から、パトリック・ビッテーフリップ前欧州委員会イノベーション総局国際協力局日本・ロシア係長をアドバイザーにむかえています。今回は、アドバイザーの助言のもと、日欧間の共通の研究課題である、1. 社会安全保障問題、2. Smart City、3. 西欧・東欧間の文化交流を取り上げました。シンポジウムでは参加者が熱心に発表に聞き入り、活発な議論が繰り広げられました。



アドバイザーボード報告

神戸大学では、2015年より欧州の著名な研究者や政府機関関係者が、アドバイザーに就任しています。海外の産業界や学界等の意見を取り入れることで、国際水準の意見を反映し、本学の教育研究の質を向上させることを目的としています。

今回、10月23日にブリュッセルオフィスで開催されたアドバイザーボードでは、ヘルマン・ファン・ロンブイ前欧州理事会常任議長、ロジャー・グッドマンオックスフォード大学セントアントニーズカレッジ学寮長、イェルジ・ドラホシュチェコ科学アカデミー名誉会長の参加を得て、海外拠点の設置・運営方法、国際共著論文数増加に対する取り組み、教員の評価方法などについて、所属機関との比較を交えながら、武田廣学長出席のもと、本学の役員とガバナンス機能の強化のための意見交換が行われました。



Philadelphia Museum of Artにて



「Cathedral of Learning」ピッツバーグ大学

留学だより
 アメリカでの交換留学を終えて
 工学部情報知能工学科3年 長谷川 公大
 HASEGAWA Kimihito

去年の8月からアメリカ合衆国ペンシルベニア州ピッツバーグ大学にて二学期間交換留学をし、その後4ヶ月間同じピッツバーグ市内にあるカーネギーメロン大学でサマーインターシップに参加してきました。

アメリカ留学に関しては小さい時から漠然とした憧れがあったのですが、真剣に考え始めたのは、大学に入り自然言語処理という分野に興味を持ってからです。自然言語処理とは、人間の使う言語を計算機に処理させることを目的とした分野です。将来的にアメリカの大学院への進学を考えており、そのための情報収集も含めて、現地での勉強・生活を体験し、その中で英語力を向上させようと思ひ、交換留学を決意しました。慣れない環境の中で勉強漬けの日々は大変ではありましたが、周りの学生がよく勉強するの姿も、それほど苦だとは感じませんでした。また、週末の大学バス観戦や、長期休暇中に車を借りてあちこち旅行したのもいい思い出です。交換留学終了後はサマーインターンとして、自然言語処理に関する研究に携われる機会を運良く手にすることができ、大変刺激的で良い経験となりました。

交換留学全体を通して様々な方に助けていただき、大変感謝しています。受けたご恩を忘れず、またそのご恩を次に受け継いでいけたらと思います。交換留学に興味のある方は、ぜひ一度神戸大学の留学フェアに参加してみてください。

課外活動も、趣味も！
 たくさんの方にチャレンジ

神戸大学でどのようなキャンパスライフを過ごしていますか？

今は、日本語の勉強をしながら、大学院の試験を受ける準備をしています。私は、日本の翻訳のプロセスについて研究したいと思っています。他の言語を日本の文化に合わせて翻訳するとき、どのようなことが起きているのかに興味があります。これまでに名古屋の大学にも留学したことがありますが、メンターとして神戸大学の国際文化学研究所の先生に教わりたと思って、神戸大学にきました。

勉強の他にも、演劇研究会の「はちの巣座」に入っていますし、日本の漫画やアニメが大好きで、コスプレのイベントに参加したりもしています。

「はちの巣座」に入ったのはなぜですか？

神戸大学にきたばかりの頃に、いろいろな部活が新入生募集のチラシを配っていました。はちの巣座のチラシをもらって、それに演劇の公演がやっていると書いてあったので、面白そうだなと思って観に行きました。大学生の部活だから、そんなに凄い劇ではないだろうなと思っていたのですが、実際に観てすごく驚きました。舞台もちゃんと作ってあって、役者もとても上手でした。大学生がこんな凄いクオリティの演劇ができるなんて、思っていませんでした。それで、私もここで本気で演劇をしたいと思いました。

新人公演では、私も役者をしました。セリフがすごく難しい演劇でした。私の役はセリフが多くて、その中の一つは漢字だらけで大変でした。「純粋理性批判、実践理性批判、形而上学、言論判断力批判」とかそんな感じでした(笑)。今は、新しい公演の準備をしています。今回は、私は衣装とメイクのチームです。

日本の漫画やアニメが好きなんです。

はい、すごく好きです。正直、私はすごくオタクです(笑)。自分でもコスプレをします。スロベニアでもコスプレイベントがあって、よく参加していました。スロベニアでは、まだコスプレをする人が少ないので、その中では私も結構知られていました。前は日本のアニメや漫画のことを知っている人が少なかったのですが、最近は好きな人が増えてきていて、大きなイベントも開催されています。

今後の目標を教えてください。

大学院の試験に受かるのが一番の目標です。大学院に入ったら、私の日常がどう変わるかわからないですが、はちの巣座の活動も続けたいと思います。日本のコスプレイベントにももっと行きたいです。いい人生のためには、たくさんの経験が必要ですから、もちろん勉強や研究も大事ですけど、他のこともいっぱい楽しめたらいいなと思います。



はちの巣座の活動の様子



ハートブレイカーのコスプレ



スロベニアの風景

こんにちは！
 留学生です



サラ・フェルチャル

Sara Ferčal

国際文化学研究所・研究生
 スロベニア出身。演劇研究会「はちの巣座」に所属。日本の漫画やアニメが好きで、自身でもオリジナルキャラクター「ハートブレイカー」のコスプレをする。



スロベニア

中央ヨーロッパに位置する共和制国家。首都はリュブリャナで、人口は約207万人。ジュリア・アルプスの美しい山々や湖に恵まれており、登山や山岳スキーに世界中から観光客がやってくる。

世界各国から来た約1300人の留学生が神戸大学で学んでいます。このコーナーでは、母国の文化や習慣などの話を交えながら、国境を越えて頑張っている留学生にスポットを当てます。

Mini News

深江グラウンドの芝生化工事が完成しました

深江グラウンド（海事科学部キャンパス）の芝生化工事が完成し、10月6日に記念式典を開催しました。

今回のグラウンド芝生化は、ラグビー部OBの皆様が中心となり、同部や医学部ラグビー部などのOBの皆様にも広く呼びかけられ、3千万円を超える募金を集めて本学にご寄付いただき、実現したものです。

グラウンドの芝生化は、プレイヤーの負傷事故軽減のみならず、今後、ホームグラウンドで公式戦を行うことができるようになり、ラグビー部・医学部ラグビー部をはじめ、女子ラクロス部、女子タッチフットボール部などのグラウンドを使用する課外活動団体の更なる発展に大いに寄与します。

式典当日は、来賓、OB、現役員、大学関係者など約180人が出席。記念交流試合や祝賀会も開催され、芝生の感触を確かめたり、思い出話に花を咲かせるなど、心ゆくまで楽しみました。

式典当日は、来賓、OB、現役員、大学関係者など約180人が出席。記念交流試合や祝賀会も開催され、芝生の感触を確かめたり、思い出話に花を咲かせるなど、心ゆくまで楽しみました。



フォトコンテストを開催しました

神大うりぼーの公式キャラクター化及び大学Instagramアカウントの開設1周年を記念し、『神戸大学フォトコンテスト』を開催しました。応募総数299件の中から、キャンパス風景部門・神大うりぼー部門でそれぞれベスト3を決定。入賞者には神大うりぼーグッズの詰め合わせが贈られました。

応募作品はすべて、Instagramハッシュタグ「#神戸大学フォトコンテスト」または、「#kobeuniversityphotocontest」でご覧いただけます。



キャンパス風景部門



神大うりぼー部門



読者の皆様へアンケートのお願い

神戸大学広報誌『風』12号をお読みになったの感想をお聞かせください。今後の誌面作りの参考にさせていただきます。

1.どの記事に関心を持たれましたか 2.その記事についてどのような感想を持たれましたか 3.今後読みたい記事 4.その他何でもご感想を

アンケートの回答は神戸大学広報課のメールアドレスをお願いします。

✉ ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp

WEBフォームもありますので今すぐアクセス!



日々更新中!



神戸大学基金だより

神戸大学基金は2006年の創設以来、学生保護者、卒業生、企業など多くの方にご支援いただき、学生への支援を中心に様々な分野へのサポートを行っています。

いただいたご寄附の活用方法として、「大学全般基盤事業」と「修学支援事業」では、大学全体で行っている学生支援を実施しています。主に、

- 国際化対応として：神戸グローバルチャレンジプログラムに参加する学生、協定校に留学する学生・院生、優秀な受入留学生への助成
 - 修学支援として：経済的な理由で修学困難である学生への奨学金給付
 - 課外活動支援として：ボランティア活動を含む課外活動での遠征費等の助成
- に利用させていただいています。



神戸大学基金活用学生インタビュー

神戸グローバルチャレンジプログラム参加
農学部2年 寺井実奈さん

私は、2018年夏に3週間、ベトナム・ホーチミンでのボランティアプログラムに参加してきました。本プログラムでは、ベトナム戦争の影響で障がいを持って生まれてきた子どもたちの生活サポートを行ってきました。子どもたちと一緒に遊んだり、食べやすいよう



に工夫した食事の準備をしたりといった活動を、様々な国から参加しているボランティアと協力して取り組むことで、困難な状況にある子どもたちの手助けをし、たくさんの人と交流するという目的を達成することができました。将来、今回のプログラムを通じて得た力を活かし、世界の人々と何か一つのものを作り上げたいというのが私の夢です。神戸大学基金からの支援を受け、このような体験を得ることができ、大変感謝しています。

今後も、多数の学生が様々な体験を積む機会を得られるよう、また、経済的な不安を抱えることなく、学業に専念することができるよう支援を行っていくために、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

また、今後の基金の支援活動として、神戸大学が計画している「神戸大学インターナショナル・ハウス(仮称)」の新設もサポートしていきたいと考えています。

「神戸大学インターナショナル・ハウス(仮称)」新設計画

2022年に創設120周年を迎える本学が、世界に繋がるグローバル・ハブ・キャンパスとなるために必要不可欠な環境整備です。留学生・日本人学生の混住寮や外国人研究者ゲストハウス、オープンスペース・スタジオや共有ラボ・オフィス、24時間利用可能な

ラーニングcommons等の機能を備えた施設を新設し、先進的な研究や学びを支援するとともに、異文化交流体験プログラムを通じ、問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成を視野に入れた計画です。

ご寄附に関するご質問やご相談は、お気軽に神戸大学基金推進室へお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

神戸大学基金推進室（企画部卒業生・基金課内） TEL 078-803-5414 FAX 078-803-5024
E-Mail kikin@office.kobe-u.ac.jp

※神戸大学基金については、ホームページもご参照ください。

神戸大学基金 検索

学生広報チーム&神大うりぼー・学内探検隊！



社会科学系
図書館



法、経済、経営学部の学生が主に利用する図書館です。建物は歴史を感じさせ、「勉強しよう！」という雰囲気を醸しだしています。



■大閲覧室

創建当時の姿が今も受け継がれています。映画の中のような雰囲気、ここで勉強することでモチベーションが高まります。



■大壁画

神大の卒業生・中山正實氏による、圧倒的な迫力の壁画です！もう見慣れて当たり前になってしまっているけれど、やっぱり社会科学系図書館のシンボルはこれ！



■ラーニングcommons

複数人でも1人でも利用できるスペース。喋っていても大丈夫なので、勉強会にはもってこい！



出演：法学部2年・北浦 里紗、経済学部3年・前田 真我、神大うりぼー



神戸大学

発行日／2018年12月

編集・発行／神戸大学 総務部広報課 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL.078-803-5083 FAX.078-803-5088

アートディレクション・デザイン／有限会社テイクリエイション 印刷／能登印刷株式会社

©2018 神戸大学 ※本誌に掲載されている記事、写真、図表の無断転載を禁じます。